

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 加島 卓

本論文は江戸末期から1970年代に至るまでの「広告制作者」の自己認識の変遷を、時代ごとの広告・広告制作についての意味づけ・言説および広告を取り巻く社会的・組織的制度的変容と関連付けながら、歴史社会学的な手法によって辿り返したものである。従来の広告史研究が、作品としての広告、作品の作者としての広告制作者の存在を、貫歴史的に同定しうる分析単位として作品史、作家史を描き出してきたのに対し、本論文は、広告および広告制作者といったカテゴリーが有意味なものとして認識されるようになる歴史的由来を、筆者が「事象内記述」と呼ぶエスノメソドロジー的な観点に則った方法論に立脚し、膨大な史資料に基づいて丁寧に記述しており、広告、広告制作の意味構成の歴史にかかわる独創的かつ画期的な研究であると評価しうる。

第一章では、本論文がよって立つ問題意識と方法論が、先行研究との差異を明示したうえで記述される。既述のように、本論文では、当事者によるカテゴリー執行に定位する事象内記述という方法が採用されている。それはある意味で従来言説分析と呼ばれてきたものと近接する方法論であるが、そこでは、言説が言及する対象の変化と相関して「言説と対象の関係」そのものが変化するという点に方法論的な重点が置かれ、当事者水準の「言説／対象」の認識に寄り添う形で分析を進めることが目指されている。言説分析の先行研究においてもしばしば、分析者が操作的に言説や対象の同一性を画定してしまうことの問題が指摘されてきたが、本論文は、そうした問題を重要な分析課題として引き受けた研究であるといえよう。

第二章では、江戸期から大正期に至るまでの「文案」「図案」をめぐる実践と言説が扱われ、広告の「文案」「図案」作成が、いまだ自律した社会的カテゴリーとして生成していない段階の様子が、制作をめぐる制度との連関において記述されている。続く第三章では、明治末期から大正期にかけての印刷図案を素材として、図案制作が工芸からじょじょに自律し、ポスターというメディアや技術をめぐる言説などとの連関から、図案作成と広告作成という二つのカテゴリーが近接し始めるダイナミズムが論じられ、作品（制作物）とその作者の密接な関係性を特権化するロマン的な作品・作者概念とは異なる、商業美術家という独特のカテゴリーが誕生する様子が分析される。四章では、商業美術家が有意味な職種カテゴリーとして成立した後、組織編成や時局の変位のなかで、「報道技術者」の独特の位置づけが生まれてくる過程が描かれ、「広告制作者」という個人と（職業団体や「国家」等の）「組織」との関係性が詳細に論じられている。続く五章では五〇年代における広告制作者の範型としての「アートディレクター」が、今泉武治・新井静一郎周辺の言説と実践に照準しつつ、広告業界との距離関係とともに記述される。六章は、広告に関わる組織を前提して存在しているアート

ディレクターとは異なるグラフィックデザイナーという存在が、デザインを囲繞する制度や言説、実践の中において立ち上がってくる様子が分析され、七章ではそうしたグラフィックデザイナーが六〇年代の「大衆化」の状況のなかで、次第に組織的な広告制作の外部に位置する「感性」を持つ存在として規定されて（あるいは自己規定して）いく様子が描き出される。技術者でも組織人でもなく、曖昧にしか規定されえない属性である「感性」を持つ主体としての〈広告制作者〉が、有意義なカテゴリーとして立ち上がってくる過程がここでの主題である。最終章では、以上のような〈広告制作者〉の意味づけと実践の変遷が、制作者という個人と、個人を取り囲む制度・組織との関連の仕方（これを本論文では「秩序」と呼んでいる）の変容として、理論的に分析される。

きわめて概括的にまとめるならば、本論文が従事しているのは、広告制作にかかわるヒト・モノ・コトの複雑な連関を、膨大な史資料に基づいて分節化し、理論的に構造化する作業である。本論文は、ヒト（広告制作者、広告人）の歴史とモノ（デザイン・広告）の歴史、コト（広告をとりまく組織やメディアなどの制度）を分離して扱ってきた従来の研究に対して、「対象」と「言説」の関係自体の変性を主題化する方法論（事象内記述）をもって対峙し、最終的には、ヒト／モノ／コトの関連の変位から、近代におけるメディア実践としての広告制作の歴史的・社会的位置を理論的に問題化するものであり、実証性、方法論的意識、理論的射程のいずれの点においても、きわめて野心的・斬新なものである。当然のことながら、そうした野心を実現するに十分な経験的分析の精度を認めることができる。

委員の中からは、自らが援用する理論的枠組みの説明、最終章での組織（広告をとりまく制度）と個人（制作者）の関連についての説明に、やや荒削りな部分があること、論述表現のスタイルが独特でわかりにくい部分が残ることなどが共通して指摘された。しかし、膨大な一次資料を読み込み、精査し、それを新しい方法論課題に即して精緻に読み解いていった本論文の実証的・理論的価値を鑑みた場合、総合的に見て本研究が博士号に値するものと全員審査委員が合意した。

よって、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。